

幕閣では

開明派で知られた老中阿部正弘（一橋派）が 39 歳の若さで没し、阿部の対抗保守勢力だった彦根の井伊直弼が登場する。

1858 年（安政 5 年）4 月、
井伊は幕府非常時の要職大老に就任すると、
さし迫っていた日米通商条約を無勅許で締結し、
次いで、徳川慶福を将軍世子に決定することに成功させるなど、
矢継ぎ早に権力の全てを己が身一身に置き、
幕府威信回復のため、尊王攘夷運動の大弾圧に乗り出した。

安政の大獄である。

前出の小説「最後の将軍」の中で「安政の大獄」の性格を一言で言い表した個所があるので引用させていただく。

「・・・ほどなく、井伊直弼の安政の大獄が始まったのである。

日本史上、直弼以外に何人もなしえなかった峻烈、深酷、残忍な思想弾圧事件であった。

いや、思想弾圧ではない。

思想とは直接には無縁であった。

*直弼の安政の大獄における目的は、思想圧迫ではなく、
もっと素朴な動機であった。*

水戸斉昭への疑団追及である。憎悪から発していた。

直弼のみるところ、水戸斉昭が、
ここ数年、将軍家乗っ取りの大陰謀を企て、
手を変え品を変えてそれを推進して来つつある。
そう観測している。

が、この観測はいかにも抽象的で、漠然としていた。

その直弼の観測に極彩色を塗り上げて現実感をもたせたのは、直弼の謀臣長野主膳である。

主膳はつねに予断をもって探偵し、

一種小説的潤色をもって直弼の公用人宇津木六之丞に報告した。

その予断というのは、

1. 水戸斉昭がその実子一橋慶喜を將軍職につかせることによってみずから幕政を総覧する。

2. この工作をさせるために松平春嶽をつかい、春嶽はその報酬として幕府執権職の地位を予約されている。

3. 一橋慶喜擁立のために水戸斉昭は京都朝廷を動かそうとし、とくに天皇の親任のあつい青蓮院宮尊融法新皇を使嗾し、尊融はこの報酬として天皇の位置を予約されている

という種類のもので、長野の観測によれば水戸斉昭は日本横領の陰謀を進めているということになるだろう。

直弼は、その傍証をかためる方向に長野主膳を奔走させた。

その方針は、京都で活躍中の浪人志士を逮捕し、拷問し、その事実を自白させることからはじめようとし、

まず、若州浪人梅田雲浜を逮捕したが、いっこうに斉昭謀反の事実があらわれず、

さらにつぎつぎと捕縛し、ついには被逮捕者は公卿、大名の家来に及び、さらに検断の範囲は上位にのぼって公卿、大名にまでおよび、

日本中の憂国活動者を総搦めにしようという勢いになった……」

引用文にあるように

梅田雲浜のほか、橋本左内、吉田松陰、頼三樹三郎など尊攘派の思想的指導者らが次々に捕えられ、断罪されてゆく。

この弾圧は、迅速、峻烈を極めた。

幕史の手は、当然西郷にも伸びてくる。